

浪花の十二月

「大阪くらしの今昔館」が所蔵する、大坂生まれの浮世絵師・二代長谷川貞信(1848～1940)が描いた
月ごとの大坂の行事と風景の画帖から、特に見ごたえのある場面を紹介します。

(二代長谷川貞信「浪花行事十二月」「浪花風景十二月」より)

3月 雛月 ひなづき



住吉汐干狩り

「すみよしのおひがり」

住吉高灯籠のおかれていた浜は汐干狩の名所であった。3月のひな祭りの頃には大坂や近郊の人々が身分に関わらず浜へ出て、蛤をとって楽しんだ。屋形船で十三間堀川を通り訪れる一行もいる。長峽橋の西詰にある茶店では、蛤の吸い物を名物としており、「蛤茶屋」とよばれた。

5月 橘月 たちばなづき



梅田牛の敷入り

「うめだうしのやぶいり」

梅田の堤では5月5日の早朝、近隣の農夫が牛を飾り付けて堤で自由に駆けさせる「牛の敷入」が行われた。牛が病にかからなくなるとされ、農夫は牛にちまきを食べさせて人々はその様子を見学した。また、子供がそのちまきを食べると疱瘡(天然痘)が軽くなるとも信じられていた。

4月 卯之花月 うのはなづき



ざこば魚じま

「ざこばうおじま」

雑喉場の魚市は江戸堀・京町堀などの西にあり、魚問屋が軒を連ねた。遠近の浦から運ばれるのは、クジラやマグロといった大魚から、イワシなどの小魚までさまざま。明け方のまだ薄暗いなか、問屋の提灯が光る。魚を小船から降ろし、問屋に運び込むにぎやかな様子が描かれている。

6月 皐月 さつき



五月雨の茶白山

「さみだれのちやうすやま」

茶白山は一心寺の南にあり、もとは前方後円古墳であったと伝来している。大坂冬の陣、夏の陣で陣営にもなった。宝暦9年(1759)の一心寺出開帳の折には茶白山も仮設の茶店でにぎわったが、その後は立ち入りが禁じられた。江戸の道灌山・京都の嵐山・大坂の茶白山と並び称された。